

大谷池

愛媛県伊予市の大谷池は灌漑面積約 1,100ha の規模を誇る県下最大のため池です。大谷川を堰き止めてため池を築き、灌漑用水の確保と洪水被害の軽減を図ろうとする試みは江戸時代からありましたが、実現には至りませんでした。

大正 10 年に 36 歳で南伊予村の村長に就任した武智惣五郎は、大正 11 年の干ばつと翌 12 年の水害を機に、大谷池の築造を決意しました。大正 13 年に隣接する北伊予村、郡中町、松前町の 3 か町村に働きかけ、南伊予村外 3 か村耕地整理組合を設立し、自ら組合長となり、ため池の実現に奔走しました。惣五郎は計画書を作成し、地域の住民や県に対して大谷池築造の必要性を説きましたが、理解や協力を得ることはできませんでした。

続いて昭和 5 年の干ばつで大谷川流域が収穫皆無や減収という悲惨な状況となったため、惣五郎は県知事に窮状を訴え、県知事は県議会に大谷池築造に関する議案を提出しましたが、政争により否決されました。惣五郎は党派間の対立が続く県議会に頼っていたのでは実現不可能と判断し、国に直接働きかけることを決意しました。県知事や地元選出の代議士の応援もあり、昭和 6 年 1 月に「県議会の議決は公益に害するにより、大谷池築造について原案の執行を命ずる」という内務省令が出され、国から工事執行の許可が下りました。

昭和 7 年に県営排水改良事業として工事が開始され、工事は南伊予村外 3 か町村用排水改良工事組合が請け負いました。人海戦術による工事は、昭和 9 年の室戸台風により仮締切り工事や基礎工事が流失埋没するという被害を受けました。また、脆弱な地質のために漏水防止用の液状セメントを注入する新たな工事が必要となり工事費が増大し、さらに戦時下の資材不足・労働力不足もあり、二度の計画変更を余儀なくされました。幸い昭和 17 年からは工事が県の直営方式で進められることになり、昭和 20 年に大谷池が完成しました。工事開始から 14 年、工事従事者は延べ 37 万 3,000 人に及びました。大谷池完成の陰には、立ち退きを強いられた 7 戸の家族がいたこと、工事中の崩落事故で 3 人の犠牲者が出たことも忘れることができません。池のほわりには殉職者供養塔、武智惣五郎氏頌徳碑などが建立されています。

大谷池は平成 22 年に農林水産省の「全国ため池百選」に選定されました。選定理由として、地域の先人が長年にわたって築いた県下最大のため池であること、地域農業の発展の礎を築いていること、地域住民の参画により保全・維持活動が行われていること、春は桜、夏は青葉、秋は紅葉、秋から冬にかけては渡り鳥が飛来するなど、四季折々の景観が人々の憩いの場となっていることなどがあげられています。

<参考文献：伊豫郡大谷池土地改良区編「県下最大のため池 大谷池」2011 年、伊豫郡大谷池土地改良区編「大谷池 築造五拾周年記念誌」1994 年、愛媛県土地改良事業団体連合会編「愛媛の土地改良史」1986 年など>

